

主婦・母親目線で

家族に美味しいものを！が原点

しもかわ まき
下川 麻紀

(42歳)

山添村的野



思い立ったら動く。
読んで、学んで、実践して

いざ本格的に農業をするとなったとき、それまで全く知識や経験を得る機会がなかった下川さんは、奈良県農業大学のシニアファーマー養成講座を受講することに決めた。通常、農業大学校へは1〜3年みっちり通うが、同講座は3カ月間、週2回程度の内容だったため、家事や農業と並行して学ぶことができるからだ。

同時に、よくある料理本から難しい専門書まで、農業につながるさまざまな本を読みあさっていく。

学びと実践を同時進行で行う中、問題となったのは、戻し受けた広い農地で



何を育てていくかということ。山添村は山間地域ではあるが、県内の他の山間地域と比べると標高は低い。そのため、野菜の生育は平地で育てるより若干遅い程度で、標高の高い他の山間地域の強みである、生育時期を大幅にずらし価格の高い時期に野菜を出荷することも難しい。

そこで考えたのが、西洋野菜などの海外の野菜を中心に、県内ではあまり生産されていない希少価値の高い野菜への挑戦だった。発想の原点は、「料理番組などに出てくる西洋野菜を手軽に入手できる環境を」というもの。毎日料理をする主婦だからこそ生まれた考えだった。現在では、黒いラディッシュ、白いトマト、カーボロネロ（イタリアの黒キャベツ）、プランタレッタ（ローマ地方の代表的な葉物野菜）、アーティチョークなど、多種多様な野菜を育てている。

本格的な農業は6年目に突入したが、下川さんの前を向いて動く姿勢は今も変わらない。収益性向上を考えて新たな野菜に挑戦しようと思ひ、昨年、数少ない



「結婚」から生まれた
「農業」との出会い

今回「がんばる奈良の農業者」初の女性農業者として紹介するのは下川麻紀さん。愛媛県で生まれ育つた下川さんが、奈良の地で農業に従事するきっかけとなったのは、結婚によるご主人の実家への移住だった。

10年前に結婚を機に移り住んだのは、大和高原の山添村。今も豊かな自然が残る山間地域である。自宅前には小川が流れ、見渡す限り田畑や山ばかり。町中で育つたという下川さんにとって、最初は

山添村のレンコン生産者に教えを請い、今春から備中レンコンの生産を始めた。

「いかに利益を取れるかはもちろん大事にしつつ、でも、とにかく野菜の生長する姿を見るのが嬉しい。そのためにいろんなことに挑戦していきたいんです。今秋にはレンコン掘りの観光農園も始めようと思つています」と話す下川さんはいつも明るい。

我が子の一言が変えた、
生産の在り方

元気で前向きな下川さんだが、就農して間もない頃、心に突き刺さる出来事があった。当初、農業などがある程度使用し、生産性を高めて取り組んでいた下川さん。あるとき、野菜があまり好きではない我が子が、畑で採れたて野菜を食べ、「お母さんの野菜って世界一おいしいね」と言ってくれた。嬉しい反面、我が子が食べているのを目の当たりにすると、農業のかかったこの野菜は安全・安心なのか心配になった。そう思うといつてもたつてもいられず、その日を境に農業を一切使用しないことを決意する。

現在、畑には蝶などが舞い、野菜以外にもさまざまな草木が競って芽を出す。農業を使っていた頃とは比べものにならない手間が増え、生産性は落ちたが、そ

さぞ寂しかっただろう、と思いきや、「まったく寂しさはありませんでした。むしろ、自然は豊かだし、奈良市街地まで数十分で行ける環境に喜んだくらいです」と下川さん。

元来、何事にも前向きな性格で、新しい土地での出会いは多くの刺激を生んでくれた。中でも、夫の両親が家庭用にも規模で行っていた畑の手伝いは、野菜の生長に直に触れ、強いやりがいを感じた。いつしか手伝いだけでは物足りなくなつた下川さんは、夫の両親が人に任せていた畑を戻してもらい、自身で多品目の野菜を栽培するようになっていく。

それでも、誰もが心おきなく安心して食べられる野菜作りに喜びを感じている。

こうして自分が安全・安心と納得できるようになつた野菜を少しでも多くの人に知ってもらおうと、いろいろな取組や団体にも積極的に参加している。「奈良県にうまいものなし」との悪評を払拭すべく、おいしいものを広めようと試みる『奈良のうまいもの会』への参加もそのひとつだ。ここでは、『大和情熱野菜・玉手箱』として、各家庭に下川さんの野菜を含む奈良県産野菜の宅配セットの販売などを行っている。

農業に本腰を入れる以前、お菓子作りに没頭し、勢いそのままに一ヶ月間フランス・パリで菓子作りを学んだという下川さん。次なる目標は、自身で作つた野菜で菓子作りをすること。湧き上がる情熱と行動力は、下川さんの夢を次から次へと現実のものに変えていく。

